

2012年9月1日 Vol.0064

「検察肅正」対談「検察に狙われた男たち」

鈴木宗男 × 堀江貴文 × 三井環 ①

---

特捜部に狙われた男たち—自らの身に降りかかった無実を訴えるため、検察と戦い続ける3人が集まった。政治家、起業家、元検察官とそれぞれの肩書は違えど、目的はひとつ。まずは堀江氏と三井氏の二人で侃々諤々の議論が始まった—。

- 
- 「生きた会社」を狙うことの悪影響
  - 目の前でウソをつかれて 「フザけんなよー」って (堀江)

- 
- 「生きた会社」を狙うことの悪影響■

堀江：

今日は宜しくお願いします。僕は一連のライブドア事件で逮捕されたことで検察と対峙することになって、初めて三井さんの存在や裏ガネの話も知るようになったんですけど、こんなことホントにあるのかってびっくりしたんです。僕ですらこうですから、一般の人は検察の裏ガネ問題なんて全然知らないでしょうね。

三井：

そうですね

堀江：

まず、そもそも僕がなんで逮捕されたのか。検察に目をつけられた理由が何なのか。元検察組織にいた三井さんはどう見られていますか。

三井：

まず堀江さんの逮捕の前提として「けもの道」を知っておかなければいけません。簡単にいえば、検察が自分たちの裏ガネづくりを不問に付すことと引き換えに時の小泉政権に大きな借りを作ったことで牙を抜かれてしまった。日歯連事件での体たらくがいい例です。これが堀江さんにもライブドア事件にも繋がっているのです。

堀江：  
どうしてですか。

三井：  
検察は特捜捜査ができなくなったんです。政界に手をつけられなくなったから、組織の存続意義を保つためにも経済検察に移行するしかなかったんです。規制緩和の世の中で次々と新たなターゲットが生まれている状況でしたから。その象徴として目立っていたから堀江さんが狙われた。時代の寵児だったわけだから（笑）。

堀江：  
ああ、なるほど（笑）。

三井：  
これまで「生きた会社」を検察がやることはなかったんですよ。「死んだ会社」だけ。特捜部が生きた会社をやるということは、社会に大きな影響を与えるということですから。経済活動が社会の根幹をなしている資本主義経済においてやってはいけないことですよ。

堀江：  
そうですね。ライブドアショックによる株式市場の急落なんてその悪い例。検察はわかってやっていたんでしょうけど。

三井：  
まだ、判決は出ていないんですよ。検察にはずいぶん抵抗したみたいだけど、どんな印象を持ちましたか。

堀江：  
よく言われますけど、完全にストーリーありき、でしたね。

三井：

裁判で話すことより、検察官の前で話したことが正しいとされている。検面調書（検面）の信用性と法廷での証言の信用性は裁判では全然違って検面がすべて。裁判官の前で話したことは信じられないとはおかしい話でしょう。

堀江：

おかしいですよね。アレって、なんで偽証で引っ張らないんですか。検面が信用できるといいながら、法廷で違うことをしゃべるじゃないですか。偽証罪で引っ張ればいいでしょう？

三井：

いやいやそれは無理です。

堀江：

だって、ウソをついているんですよ。告発しましょうよ。

三井：

う〜ん（笑）。結局、裁判所は「検事の前でウソをつくはずがない」という前提ですからね。嫌疑不十分で終わるでしょう。

堀江：

でもね、僕も検面を裁判で証拠として採用されていますが、「ウソはつきません」って宣誓しているのに、法廷でしゃべっていることが違うんだから偽証じゃないかって思ったんですよ。

---

■目の前でウソをつかれて 「フザけんなよー」って （堀江） ■

三井：

裁判では堀江さんは検面に不同意だったんですか。

堀江：

7割くらい不同意です。違っているところばかりです。検察側の証人を法廷で攻めるといろんな矛盾が出るんです。例えばある証人はボクに「メー

ルでライブドアに株を売って報告したら、すごいねって返信がありました」と証言したんです。でもどれだけ調べてもその返信メールは見つからないんですよ。

三井：  
それは検面に書かれていなかったの？

堀江：  
いや、検面は関係なくて、法廷での話です。法廷で証人が言い過ぎちゃったんです。いくらひっくり返して探してもないのに、「いや、あったんです」と言い張るわけです。客観証拠がないんです。

三井：  
要は検面に加えて、裁判で堀江さんが不利になるような証言をしてやろうってわけだ。

堀江：  
そういう意図だったんでしょうけど。これは宮内（亮治・元ライブドア取締役）さんじゃない別の被告人ですけど、判決を軽くしたいから僕に罪を押し付けたんです。（法廷の）僕の座る目の前でウソつかれましたから、「え～、おまえフザけんなよ！」って思いましたよ（笑）。コレって偽証じゃないですか。検面にも書かれてないんだし。

三井：  
しかし、立会検事も下手なことやったね。検事は相当な証人テストを何度も何度もやるんですよ。そんな検面はないこと言わせませんよ。

堀江：  
それだけウソが多かったからでしょう。あれはつい本番で間違えちゃったんですよ（笑）。でもそんなことまでして公判を維持しようとする検察って何ですかね。事件をやり続けなければ特捜っていうのは社会の害悪でしかない。逮捕・起訴された当事者は社会的に抹殺されますよ。そんな組織の存在意義ってあるんでしょうか。なんかいびつですよ。

三井：  
法務検察は表では犯罪を検挙して裏では組織的な裏ガネを作っている。ど

う思います？

堀江：

ヤクザみたいですね。

三井：

ヤクザ以上です。正義のフリをしているんですから。

(ここで鈴木議員が登場)

鈴木：

どうも遅くなって、すみません。

堀江：

ちょうど検察の裏ガネについての話に入るところです。三井さん、検察組織の人間ならばみんな裏金のことは知っているんですか。

三井：

いや、平検（平の検事）は知らない。次席検事にならないとわからない。決裁をしますからね。事務局長から裏ガネの説明をまず受ける。彼の部屋に裏金の金庫があってそこに金が入っています。

鈴木：

地方検察庁なら検事正が使える。後は.....。

三井：

高検なら検事長、最高検は検事総長、法務省なら事務次官、刑事局長、官房長の3人です。

鈴木：

例えば東京地検の次席検事は使えない？

三井：

駄目です。トップだけです。

鈴木：

当方で 5 億 5000 万円ありましたからね。

堀江：

裏金の原資はどこにあるんですか。

三井：

国民の税金ですよ。

堀江：

え〜、税金なんだ。なんでそんなことができるんですか。どんなシステムで支出されるとか。

三井：

調査活動費という予算があるんですよ。本来は情報提供者への謝礼として支払われるんですが、それがそのまま 1 銭も使われずに裏ガネに化ける。

堀江：

ホントは情報提供者にはお金をくれるんだ。

鈴木：

言ってみれば、調査活動費ですから警察にもある。内閣なら官房機密費、外務省なら報償費とか。これは領収書も何もいない。「使い切りのお金」なんです。それをいいことに正規の使い方をしないで自分たちで勝手に使っていたというのが真相です。

堀江：

賭け麻雀の支払いとかに（笑）

鈴木：

あります。でも 7500 万円まで減りましたよ。それは三井さんの告発のおかげなんです。

（双葉新書 「権力」に操られる検察より 次号に続く）

---

著者：三井環（元大阪高検公安部長）